



**Data**

監督: ノラ・トゥーミー  
 原作: デボラ・エリス『生きのびるために』(さ・え・ら書房)  
 出演: サーラ・チャウディリー/ソーマ・チハヤー/ラーラ・シディーク/シャイスタ・ラティーフ/カワ・アダ/アリ・バットショー/ヌリーナ・ゲラムガウス

## 👁️👁️ みどころ

時代は2001年の9月11日アメリカ同時多発テロ直後。舞台はアフガニスタンのカブール。父親を逮捕され、女ばかりになってしまった11歳の少女パヴァーナの家族はどうやって生きていくの？

アフガンの男女差別の実態は想像を絶するもの。女だけでの外出禁止！とは一体ナニ？しかして、本作のタイトル『ブレッドウィナー』とは？髪を切り、少年になった少女の勇気の物語は、4月7日公開の『ムーラン』(20年)も同じだが、戦士になるムーランと違ってパヴァーナは何をするの？

新型コロナウィルスと同じように(?)脅威を振るうタリバンに真正面から対抗しても負けるだけ。しかし、物語の世界なら「村人を苦しませる象の王」だって服従させることができるのでは・・・？

アニメならではの想像力を駆使した、映像で語るアフガンの実態を、少年になったパヴァーナの生きざまからしっかり学びたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■舞台はアフガン！主人公は11歳の少女！タイトルは？■□■

本作と同じ日に観た台湾のソン・シンイン監督のアニメ『幸福路のチー』(17年)は、東京アニメアワードフェスティバル2018でグランプリ受賞をはじめとして高く評価されている。それと同じように、第90回アカデミー賞長編アニメ映画賞ノミネートをはじめ、世界中から高く評価されているアニメ映画が、世界が注目するアイルランドのアニメーションスタジオ「カートゥーン・サルーン」で作られた本作だ。

その舞台は、2001年アメリカ同時多発テロ事件後のアフガニスタンのカブール。主

人公は、父ヌルッラー（アリ・バットショー）、母ファティマ（ラーラ・シディーク）、姉ソラヤ（シャイスタ・ラティーフ）、弟の5人家族で暮らす、11歳の少女パヴァーナ（サーラ・チャウディリー）だ。それはそれでわかるのだが、原題の『THE BREADWINNER』も、邦題の『ブレッドウィナー』も、その意味は一体ナニ？「ブレッドウィナー（BREADWINNER）」は、「一家の稼ぎ手」という意味だそうだが、なぜ本作はそんなタイトルに？

日本は経済大国だが、まだまだ男尊女卑の国で、男女同権のレベルでは121位と大きく後れを取っている。男女同権の面で上位を独占する北欧諸国や、フランス、ドイツ等の女性の権利が強い先進民主主義国では、女性が稼ぐのは当たり前。中国共産党が一党支配する異質な国、中国でもその点は同じだ。したがって、それらの国では女性が「一家の稼ぎ手」になるケースは格別珍しくないが、アフガンでは、それは極めて特異なことらしい。私たち日本人はアフガニスタンについてほとんど何も知らないが、わざわざそんなタイトルで11歳の少女を主人公としたアニメ映画が生まれ、絶賛されたのは、一体なぜ？

## ■2020年のヒロインあれこれ。それと対比すれば？■

2020年1月1日付読売新聞は、「2020年の映画『戦うヒロイン』『あの名作』と題して、「戦う女性が主人公の大作や1980年代のヒット作の続編、名作・名曲の映像化など、2020年も話題作が目白押し。注目の映画を紹介」している。その見出しは「勇敢に華麗アクション」で、①『ムーラン』、②『ハーレイ・クインの華麗なる覚醒 BIRDS OF PREY』、③『ブラック・ウィドウ』、④『ワンダー・ウーマン 1984』を紹介しているが、「この4作はいずれも女性監督。そして、女性同士のタッグで痛快アクション作を作り上げる」ものだ。私は『ムーラン』の予告編を何度も見たが、これは、女の子のムーランが父の身代わりとなり、男性と偽って国の運命をかけた戦いに向かう映画だ。

それに対し、本作のパヴァーナも11歳の「戦うヒロイン」だが、『ムーラン』のように自ら剣を操って男たちと死闘を繰り広げるものではない。本作は、髪を切り“少年”になった少女の勇気の物語だ。アフガニスタンでは、何と女性1人での外出が禁じられているらしい。そのため、ある日、父がタリバンに捕まってしまうと、残された女たちだけでは働くことはもちろん、水を汲むことも食料品を買いに行くこともできなくなってしまうそうだから、ひどい。父親のヌルッラーは戦争で片足を失っているが、元は教師。パヴァーナが物語を作るのが大好きな少女に育ったのは、この父親と、タリバン政権によって今は活動できなくなっているが、元作家だった母親ファティマのおかげだ。そんなヌルッラーには教え子がたくさんいたが、その1人であるイドリース（ヌリーン・グラムガウス）は、1月19日に観た『ジョジョ・ラビット』の、ヒトラーユーゲントに憧れる少年たちのような、タリバンの信奉者。権力を笠に着て、何かとパヴァーナたちに嫌がらせを仕掛ける、実に嫌な奴だ。

## ■□■髪を切り、男として何を？その延長は？■□■

2020年1月末、中国の武漢から発生した新型コロナウイルスを原因とする新型肺炎の猛威が世界中に広がっているが、2月1日のニュースでは、中国の看護師たちがその応援に向かうため一斉に美容室で髪を切る風景が映し出されていた。これは、看護服を着るについて長い髪が邪魔になるためだが、女性にとって長い髪を切るのは相当の決断だ。しかして、ムーランの決断も本作のパヴァーナの決断も、それに決して劣るものではない。もっとも、ムーランの場合は、剣を持って敵と切り結ぶという任務がハッキリしているが、パヴァーナの場合は髪を切り少年の姿になって何をするのか？

それは、まずタイトル通り『ブレッドウィナー』として父親不在となった家族の生活の糧を得ることだが、その延長には逮捕され刑務所に収容されている父親を救い出すという大切な任務があった。しかし、そのためには一体どうすればいいの？片足を失っている父親には丈が不可欠だが、あの逮捕劇の混乱の中、丈は家に置かれたまま。したがって、何が何でもその丈を父親の下に届けなければならないから、とにかくそれを持って父親が収容されている刑務所に向けて出発！そんなパヴァーナを助けるのが、パヴァーナに手紙を読んでもらったラザク（カワ・アダ）だ。

本作の原作は、カナダの作家で平和活動家であるデボラ・エリスが書いていた『生きるために』だが、本作で描かれる女だけで父親に丈を届ける困難さは想像を絶するもの。長年、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）の特使を務め、アフガニスタンで少女たちの学校教育を支援しているハリウッド女優のアンジェリーナ・ジョリーの参加を得て作られた本作では、そんな厳しいアフガンの現実と少女たちの現実をしっかりと直視したい。

## ■□■物語は自由に！空想も広く！村人を苦しめる象の王は？■□■

パヴァーナの父親は戦争で片足を失っただけだが、兄は既に戦死。5人家族で暮らしていたパヴァーナは、姉のソラヤとよくケンカしていたが、弟にはパヴァーナが空想した物語を語ってやるのが常だった。そして、空想はどこまでも広く広がっていくし、物語を作るのは自由だから、元教師の父と元作家の母を持つパヴァーナの想像力が育っていたのはある意味で当然だ。ところが、パヴァーナが弟に語る物語の主人公はいつも少年。そして、それがどこか亡くなった兄のスリマン（ヌリーン・グラムガウス）に重なっていたのは偶然？それとも・・・？

それはともかく、本作では長い髪を切って少年として生きていくことを余儀なくされ、今は丈を持って父親に向かって歩み続けるパヴァーナの現実の物語と、パヴァーナが頭の中で想像する物語の主人公たる少年の物語が、いつの頃からか平行しながら進んでいくので、その手法に注目！パヴァーナが作り出した物語は「村人を苦しめる象の王の物語」だが、この象の王とは何者？それが、パヴァーナたちを苦しめるタリバンであることは明らか

かだが、その猛威は新型コロナウイルスと同じだから、それに対抗するのは極めて困難。しかし、パヴァーナが兄スリマンの名前で語る物語の主人公は勇気ある男だから、山の上で君臨している象の王に向かって如何に挑んでいくの？ 1月25日に観た『テリー・ギリアムのドン・キホーテ』(18年)では、巨大な風車を巨人と思い込んだドン・キホーテは、その風車に槍を向けて突進していったが、本作では、スリマンが山の頂上に向けて一歩ずつ歩み続ける姿に注目！

1月25日観た『CATS』(19年)は人気ミュージカルを映画化した超話題作だったが、「VFX(視覚効果)で人間のスタイルのまま毛を生やし、尻尾を振る」演出が過激すぎることもあって評判はイマイチ。しかし、アニメならパヴァーナが頭の中でイメージしている山の頂上に君臨する「象の王」の姿を的確にスクリーン上に表現することができる。本作後半からクライマックスにかけては、パヴァーナがラザクたちの助けを借りて何とか父親を救い出す現実の姿と、スリマンが象の王を見事に服従させる姿が描かれるので、それに注目したい。なるほど、なるほど。タリバンが支配しているアフガンの現状の改善や、ここまで酷いアフガンでの男女差別の改善が現実的テーマとしてかなり困難なことはハッキリしているが、物語の中ならタリバンと同じように猛威をふるう象の王を服従させることも可能なわけだ。もっとも、私たちがそんな寓話だけで満足してはならないこともハッキリしているが、少なくとも「平和ボケ」があまりにも顕著な日本人は、本作のようなアニメを観て、広い世界をしっかりと学ぶ必要があるはずだ。

2020(令和2)年2月5日記